HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	札幌農学校とキリスト教
Author(s)	大山, 綱夫
Citation	北大百年史, 通説, 550-564
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30025
Type	departmental bulletin paper
File Information	tsusetu_p550-564.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

札幌農学校とキリスト教

大山綱夫

1　札幌農学校のキリスト教色

札幌農学校をキリスト教色の濃い特異な官立学校とみる見方は、創立後間もないころから存在し、北海道大学になってからでさえもかなりの期間続いた。これを裏づける最も古い史料に、一八七八年（明治一一）一月二十二日東京書記官から札幌書記官宛に送られた、札幌農学校のキリスト教信仰についての問い合わせ文書がある。これは、「耶宗ノ無二信者」の外国人教師の影響下に「校中耶蘇教大ニ流行シ生徒概ネ該宗ニ帰依ス」という一農学校生徒の通報を記事にしてよいかどうかという新聞社からの内々の打診に端を発していた。東京書記官は、この書簡の中でキリスト教を「官立ノ学校ニ於テ公然生徒ヘ教授候様ノ義有之候テハ御国体上ニモ関係シ以ノ外ノ事」と札幌の関係者へ注意を喚起した。(1) これに対し、同年二月十四日札幌書記官は東京書記官宛に「農黌教師頻ニ耶蘇教ヘ誘導候儀……：毛頭覚ヘ無之……官立ノ学校ニ於テ公然教授候様ノ義ハ不為致候」と返書した。(2) しかし、これは表向きの返事であり、校内では「公然教授」はともかくとしても、外国人教師や学生のキリスト教活動は続けられていた。この年札幌農学校第三期生として入学することになる青年たちは、東京出発に先き立ってキリスト教排撃を誓っていたといわれるが、(3) 札幌農学校のキリスト教色は、この時点ですでにそれほどに有名だったのである。

キリスト教的札幌農学校のイメージは、初代教頭ウィリアム・スミス・クラークへの言及やキリスト者知識人として知られるに至る札幌農学校卒業生の活動を通して維持された。北海道を超えて全国的に知られたキリスト者卒業生として、初期には佐藤昌介、大島正健、伊藤一隆、内村鑑三、新渡戸稲造、宮

部金吾、広井勇ら、時代が下っては有島武郎らを数えることができる。彼らは研究者・教育者・実業家・文筆家であり、ミッションスクールに関係する者もあった。キリスト教色イメージは、さらに卒業生の弟子たちの言動によっても増幅して維持された。太平洋戦争後東京大学の総長をつとめた南原繁と矢内原忠雄は、共に内村鑑三門下の無教会主義キリスト者であったが、師として内村や新渡戸が語られるとき、札幌農学校はキリスト教と分かちがたく結びつけられていた。矢内原は自らを札幌農学校の「精神的な子供」と自認したほどである。(4)

目を日本プロテスタント・キリスト教史に転じると、札幌は横浜・熊本と並んで日本プロテスタント発祥の地に数えられている。その際、札幌とは札幌農学校学生間に形成されたキリスト者青年集団、いわゆる「札幌バンド」を指している。十八世紀イギリスのメソジスト派の創設者ジョン・ウェスレーによって宗教的意味をこめられるようになったバンド (Band) という語は、やがて英米文化圏で教派にかかわりなく、伝道熱心な青年集団というほどの意味で使われるようになったが、日本では熊本洋学校でキリスト教に回宗し新島襄の同志社に転じた青年たちが熊本バンドと呼ばれたのが最初である。(5) そして、横浜と札幌のキリスト者集団も、それぞれ横浜バンド、札幌バンドと呼ばれるようになった。外からこのように呼称されるには、札幌にそれだけの実体があったとみなければならないが、例えば一八九三年（明治二六）札幌を訪れたカトリックのM・リボーの驚きは、その一端を物語っているであろう。彼は札幌駅の待合室の机に「大きなプロテスタントの聖書さえそこに載っている」と、札幌のプロテスタント、キリスト教の勢力に驚いたのである。(6) 下って一九一〇年の札幌を眺めてみると、宗教団体としては札幌独立基督教会（南三条西六丁目）、札幌浸礼教会（大通西六丁目新川端）、北辰教会（北一条西六丁目）、札幌組合基督教会（北一条西三丁目）、日本メソジスト札幌教会（北一条東一丁目創成川端）、札幌聖公会（北二条西四丁目）のプロテスタント六教会が街の中心部を占めていた。(7) そして、これらの教会には札幌農学校の関係者が有力な会員として在籍していた。もちろん、これらのプロテスタント教会の周りには日本古来の寺社があったし、プロテスタント人口は、八万二四二二人の札幌総人口のうち八五三名と一%を僅かに上回るに過ぎない。(8) しかし、生れながらに氏子であったり、仏教徒であったりする社会の中で、自覚的回心によってしかキリスト教徒になりえないことを考えれば、また現在日本のプロテスタント総数が人口の一%にも達してない事実を考えれば、明治期の札幌の教会数とその位置、信徒数は注目に値したのである。札幌が日本プロテスタントの発祥の一拠点とみなされたのには十分な理由

があったといわなければならない。

それでは札幌バンドを産んだ札幌農学校は、どのようにキリスト教と関わり、そのキリスト教はどのような特色を持っていたのであろうか。

2　クラークのキリスト教伝道

札幌農学校とキリスト教との直接的な関係は、初代教頭W・S・クラークによって始まる。しかし、草創期の学生の一部に、札幌へ転じる前から東京や横浜でキリスト教に触れている者がいた事実は注目してよいであろう。伊藤一隆は一八七四年（明治七）末築地のキリスト教会に通っており、明治八年札幌へ移った時には英文聖書を携帯していた。佐藤昌介は明治五年横浜修文館で宣教師サミュエル・ブラウンから英文聖書を入手し、宣教師ジェイムズ・バラの教会に通っていた。柳本通義、宮部金吾、佐久間信恭もブラウンの教えを受けていた。新渡戸稲造は札幌へ到着したとき、すでに英文聖書を携えていた。[9] 最近の研究によれば、大島正健はすでにスマイルズの『セルフ・ヘルプ』を読んでいた。[10] キリスト教やキリスト教思想へのこうした接触は、文明開化期に学問を志した有為の青年たちにかなり共通した現象であったであろう。しかし、この経験は札幌に向った者たちにとっては一時的な接触以上の意味を持つことになった。つまり、彼らはクラークの直接、間接のキリスト教伝道へ全く無準備だったのではなく、ある受け皿さえ持っていたといえるからである（ただし伊藤一隆だけはクラークに会う前にすでに回心を経験していた。）

クラークは日本に来たときキリスト教伝道を意図していなかったようである。帰国後のある講演によれば、彼は宣教師になる考えは全然なかったと述べている。[11] 彼のキリスト教伝道は、徳育についての彼にとってはごく当然の方針の結果として起った。彼は札幌農学校における徳育の教材として聖書使用を考えていた。これは当然日本政府の方針と衝突した。この間の経緯は、在日中のクラークが本国に送った書簡によって知ることができる。彼は札幌到着後、聖書使用を巡って黒田清隆開拓長官と対立した（従来、二人の対立は東京から北海道へ向う玄武丸上で起ったとされてきたが、これは根拠がない[12]）。黒田は「法律と政府高官の意向の手前聖書使用は禁止せざるを得ない」としていたが、クラークは「聖書に絶えず言及せずに道徳を教えることはできない」と強調して譲らず、黒田はついに折れて聖書使用を黙認することになった。[13] 官立学校たる札幌農学校とキリスト教との関係は、ここに始まる。これは、日本が自前で指導者養成をなし得ない時期の御雇外国人への譲歩の一例であろう。

ところで官立学校とキリスト教との関係は札幌農学校が最初ではなかった。静岡伝習所の御雇外国人エドワード・ウォレン・クラークは、一八七一年（明治四）就業契約の中からキリスト教伝道禁止の条項をはずさせ、一八七三年東京の開成学校（東京大学の前身）に移ってからもキリスト教伝道の黙認を取って、学生たちにバイブル・クラスを開いていた。[14] しかし、開成学校はキリスト教色の学校として知られるまでには至らず、プロテスタント伝道の拠点にもならなかった。この違いの原因は、ひとつには札幌のクラークが教頭として大胆に振舞えたのに対し、東京のE・W・クラークは化学教師グリフィスの助手として活動範囲や力が限られていたことによっているであろう。しかし、より大きな原因としては、札幌のクラークのキリスト者集団形成に向けての巧みな指導を挙げねばならないであろう。

クラークは、かねて横浜の宣教師L・H・ギュリックから聖書を入手していたが、[15] 帰国後の講演によれば、それらに学生の名を書き入れて各部屋に配った。すると「やがて学生達全員が彼のもとに聖書を教えてもらうためにやってきた。クラーク学長は彼らにそれは日本の法律で禁じられていると言った。法律を破ることから生ずる結果を彼らが引き受けるから、聖書を教えて下さいとクラーク学長に依頼する請願書が書かれ、すべての学生がそれに署名した。[16] 学生達は非常な興味をもって、学長の室にやってきた」という。すでに黒田から聖書使用の黙認を取りつけていたクラークは、学生の意志をも確認し、彼らの自発性を聖書に向けさせることに成功したのである。しかし、平信徒に過ぎなかった彼は、牧師のような指導はできなかった。学生たちの思い出によれば、クラークは「基督教の教理を絶へて演説することもなく」、聖書を「誦読し或は学生をして之を輪読せしめ若しくは暗誦せしむるに過ぎ」[17] なかった。先きに引用の講演の中でも聖書朗読と暗記がなされていることが報告されており、彼は「学生達に聖書を学ぶことは自力でやらなければいけないと言った」[18] とある。彼は、授業に先き立って聖書を読み、学生と共に主の祈りをとなえ、日曜日にはバイブル・クラスを持ったが、[19] 学生たちは彼から教理や説教を聞くことはほとんどなかった。学生たちは一般学科目に関してはクラークから学んだが、聖書に関してはむしろ彼と共に学んだというべきであろう。しかしそうしたクラークの姿を見て、先きに引用の学生の思い出によれば、学生たちは「只だ其の師の精神と動止とに感激し」、[20] やがてキリスト教への回宗へと向ったのである。

クラークは、教場やバイブル・クラスで学生と共に聖書を朗読し、暗誦し、それ以上の事柄に関しては学生の自発性にまかせた。しかし、彼はその自発的学びが赴くべき所に関しても配

慮していた。札幌農学校の図書室用に収められたキリスト教文献の数がそれを物語る。彼は義弟宛の書簡の中で、「私達はいま図書館に使う建物を建設中です。私達はすでに相当の数の教科書、百科事典等を持っています。あなたは何らかの形で私達が興味深い宗教的読み物を手に入れるのを助けてくれることが出来ますか。例の週報の製本したものはありませんか、もし開拓使気付で私宛てに送られてくれれば、私は一箱分の宗教関係の読み物を送る費用の一部として五十ドル喜んで払いますし、それらの書籍がちゃんとラベルをはられ、農学校図書館に納められるように取り計らいます」[21]と述べている。こうして札幌農学校図書館には、米国キリスト教書類協会（The American Tract Society）寄贈の書籍三三冊、クラーク寄贈の『絵入りキリスト教週報』（*Illustrated Christian Weekly*）等が集書され[22]、学生の閲覧に供された。

さらに学生の自発的キリスト教学習を促したものとして、学生組織「開識社」を挙げねばならないであろう。開識社は学生によって結成されたものではあるが、着想はクラークによるものであろう。というのは、英文で書かれた開識社の規約によれば、この組織は会員の文章力と演説力とを鍛練することを目的としていたが、目的をはじめ組織、活動がクラークの母校アマスト大学の「ヒッチコック探求会」（Hitchcock Society of Inquiry）と酷似しているからである。この会は一八三〇年代からアマスト大学に存在し、後に学長ヒッチコックの名が冠せられた組織であるが、討論を通して知性を磨くことを目的としていた。この会は多くの牧師を輩出した[23]。クラークは恐らくこの会をモデルに札幌農学校の学生たちの課外の知的活動を期待したのであろう。開識社の例会は毎土曜日の午後七時から開かれ、演説には日英両語が用いられ、演題にはしばしばキリスト教信仰やキリスト教的観点からの建徳的訴えが登場した。開識社はキリスト教の組織ではなかったが、ここでキリスト教の弁証を試みた学生たちは、「聖書のみ」のクラークからは聞けなかった部分を、自らの手で模索し確認したといえるであろう。内村鑑三の『余は如何にして基督信徒となりし乎』の中に出てくる、一定の題目を設定し、肯定派と否定派の二陣営に分かれて行った討論会は、開識社活動の影響下に着想されたものであるかも知れない。

しかし、クラークのキリスト者集団形成上の最大の配慮は、学生たちをキリスト教的誓約（契約）の当事者とした点にある。彼は八カ月半の札幌滞在の間に、二つの誓約を学生たちとの間で交わした。ひとつは一八七六年（明治九）十一月二十八日の「禁酒禁煙の誓約書」である。この短い文書は、アメリカ十九世紀前半の禁酒運動の高まりの中でアマスト大学で作られ

た誓約書そのままであるが、酒、煙草、阿片、賭博を禁じると同時に「神の名を汚さない」ことを厳約している点が注目に値する。つまり、この点においてこの誓約は一般的道徳に留まるものではなく、それを生み出す基としてのキリスト教の戒めをも確認しているからである。「神の名を汚さない」というのは、聖書の十戒の第一戒から第三戒までの、つまり神信仰の最も基本的部分の集約的表現と考えられる。先きに見たようにクラークは、黒田に対して、聖書に言及することなしに道徳を教えることはできないと言い張ったが、クラークの生活の中で道徳は当然のこととしてキリスト教と結びついていたのであり、それは当時のアメリカの、とりわけニューイングランド地方中心の福音主義の考え方でもあった。その意味では、この誓約書への署名者は、クラークの生きるアメリカ・キリスト教文化への関わりを約したことにもなる。署名者に意識の深浅はあったにしろ、彼らは契約の当事者として「神の名を汚さない」生活を送ることを約したのである。

もうひとつの誓いは、一八七七年（明治一〇）三月五日の「イエスを信ずる者の契約」であり、「禁酒禁煙の誓約書」よりも直接的にキリスト者集団の形成を意図した重要な文書である。これは信仰告白と戒命と信徒生活に関する部分等から成っている。この中で注目すべきは信徒生活に関する部分で、「我らはしかるべき機いたれば、試験を受けて受洗し、福音主義の教会に加わることを約束する…我ら、相助け、相い励まさんため、この誓約によって『イエスを信ずる者』と称える一団体を組織し、生活を共にする間、毎週一回以上相集いて聖書もしくは信仰の書籍雑誌を学び、共にはかり、祈禱会をなすことを、固く約束する」[24]と述べている点である。ここにはアメリカの西部にも似て開拓の進みつつある北海道という、専任牧師が居ず、教会組織も教区設定もできていない新開地でのキリスト者への配慮が読める。クラークは後述するように平信徒伝道がひとつの趨勢である時代を生きていたが、他方では教会制度の枠の中を生きている人間でもあった。「イエスを信ずる者の契約」に学生たちが署名した日、クラークは妻に次のように書いた。「今日学生達は私が彼らのために用意した書類に署名しました。これが私の出来る彼らを一つの教会に組織するにいちばん近いことです」[25]（傍点筆者）。彼は平信徒として制度的に可能な限りの配慮をし、それに則した生活を学生たちに誓わせたのである。「しかるべき機いた」ったならば洗礼を受け、「福音主義の教会に加わ」れと。そして、それまでは信仰告白を共にする集団の一員として、共に助け、共に励まし、共に学ぶべきことを誓わせたのである。回心は個人の事柄であるが、署名者は同時に信仰集団の一員としての生活を送ることを誓い、実際送

ったのである（しかし、署名者の中から脱落者が出たことも事実ではあるが）。

3　クラークと後継アメリカ人教師たち

クラークのキリスト教伝道の特徴は、平信徒による伝道という点にある。前出の三バンドの成立に際し、宣教師の指導があったのは横浜だけであり、熊本と札幌は平信徒の伝道の結実であった。しかし、熊本の場合、リロイ・ジェーンズの影響を受けた青年たちは、間もなく宣教師の指導する京都の同志社に移っており、平信徒伝道によって最も特色づけられるのは札幌である。

しかし、注意しなくてはならないのは、平信徒伝道はクラークにおける例外的な現象であったのではなく、当時のアメリカ・キリスト教の趨勢のひとつであったということである。中世以降のキリスト教勢力は、固定的なヨーロッパ社会にあっては、社会統制機関たるキルヘ（正統教会）とそれに抵抗するゼクテ（分派）であったが、これらが広大な空間社会アメリカに渡ると、いずれも相対化されて数あるなかのひとつのデノミネーション（教派教会）へと変化した。デノミネーションの社会ではプリースト（司祭・教区牧師）よりはミニスター（有資格牧師）が一般的となった。そして西部開拓が進み、伝道地域が大きく広がるにつれて、ミニスターでは間に合わず自発的プリーチャー（平信徒伝道者）が活躍するようになった。移動し拡大する社会の必要に応じ得たのは平信徒伝道者なのであった。[26]

クラークは、そうした当時のアメリカ・プロテスタンティズムのうねりの中を生きていた人間であり、必要が迫ったとき、彼は自然かつ自発的にキリスト教伝道者となったのである。こうした道を辿ったのはクラークだけではない。前出の静岡および東京でのE・W・クラーク、熊本のジェーンズ、さらに札幌でクラークの後継者となるウィリアム・ホイーラーらも平信徒でありながらキリスト教伝道を行ったのである。

アメリカでのクラーク評価は、晩年の事業失敗後は厳しいものであったが、在日中のクラークの平信徒伝道者としての活躍に関しては好意的・肯定的な評価がなされていた。一八七七年二月七日、彼の出身地アマストの新聞『アマスト・レコード』は、札幌農学校での「禁酒禁煙の誓約書」を報じ、「クリスチャンならびに善良な市民諸兄に喜んでいただきたいのは、『社会改善倶楽部』の事業が進み成功していることである……地球の裏側でアマストの人間が同じことを行なっているのを知ることは、我々の励みとなり、我々を勇気づけてくれる」[27]とクラークの働きを讃えている。この記事の二週間後、全国紙の『インディペンデント』には、日本の学生たちの間でキリスト

教への強い関心が生じているので、クラークは宣教師として日本に留まるかも知れない、という記事が出た。[28] 恐らく人々は、平信徒が伝道者の働きをし、そのまま宣教師となったとしても奇異には感じなかったであろう。クラークの働きは、宣教団体「アメリカン・ボード」の知るところとなったが、その年次報告書は、「聖霊のしるしが数多くの方法で日本のキリスト教化の働きのうちに現われている」[29]として、クラークの伝道を高く評価したのである。

札幌農学校ではクラーク離任後も、外国人教師によるキリスト教活動が続けられた。その中心となったのはホイーラーである。第二期生の町村金彌が書き残したものによれば、「我々第二期生が着札後初めて教室に出るや教頭ホキーラー氏よりバイブル一冊づゝを渡され爾後毎週一回復習講堂にてバイブルの講義を聴聞し居たり」[30]とあり、大島正健によれば、二期生はホイーラーから「禁酒禁煙の誓約書」に署名を求められた。[31] クラークが学生たちを託したメソジスト派の宣教師メリマン・ハリスの報告のなかには、「彼等（学生）学業の余暇には校外の児童に聖書を教え、又毎週祈禱会を催し……安息日となれば、祈禱と聖書の研究の為に会合す、その時にはホエーラル教授、聖書を教ゆ」[32]とあり、ホイーラーが中心となっていたことが知られる。本稿の冒頭に引用した札幌農学校のキリスト教信仰についての問い合わせは、彼の教頭時代のことである。この問い合わせは一八七八年（明治一一）二月十四日付であるが、これより一週間後の二月二十一日校長調所広丈からホイーラー教頭宛に送られたひとつの文書がある。内容は、札幌農学校の学生間に激しい宗教上の対立があり、このままでは「本校の廃置」になりかねない、という警告である。[33] 恐らく調所は、学生間対立の一因を教師の宗教活動にあるとみて、「耶宗ノ無二信者」たるホイーラー自身にも自粛を求める意図があったのではないかと思われる。

クラークが日本へ同行したもうひとりのアメリカ人教師デイヴィッド・ペンハローについては、知られるところが少ないが、彼が札幌農学校一期生の卒業式で行った演説を読むと、彼もまた「耶宗ノ無二信者」として行動していたことがうかがわれる。その中で彼は、「あなた達は全知の創造者〔なる神〕に対する依存と、同胞に対する義務を認め、正当に自分に回ってくる責任はなんであれ忠実に果たすべき義務として受け止め、正義は力のもとなりと考え、悪や誘惑に対しては恐れずにそれらが受けて当然の処置を加えなさい」[34]と、公然たる使徒的なキリスト教倫理の訴えを行った。この演説は調所をはじめとする要人の面前で行われたものである。札幌農学校におけるアメリカ人教師によるキリスト教活動は、決して「毛頭覚へ無之」と

いったものではなかったことがうかがえるのである。クラークの印象的なキリスト教活動に比べれば、ホイーラーやペンハローの働きは影が薄い。しかし、札幌農学校のキリスト教色が一時的現象に留まらず、長続きするに至った一因には、先きに挙げた集団形成に向けてのクラークの配慮とともに、クラークを後継したアメリカ人教師の働きも数えられねばならないであろう。

4　学生の平信徒伝道

さらに注目すべきは、回心し、誓約し、信徒集団を形成した学生たちも、教師たちのように自発的な伝道者となった事実である。一期生が二期生に対して行った伝道は、内村の『余は如何にして基督信徒となりし乎』の中に次のように描かれている。「当時私は、新設の官立大学の一年生だったが、すでに上級は全部（当時は全校を通じて二学年しかなかった）、ニューイングランドのキリスト信徒の科学者の力で、回心してキリスト教徒になっていた。二年生が『赤ん坊新入生』にむかって威張るのは、世界中共通だが、その上さらに、新しい宗教的熱情や伝道精神が加わったとなると、あわれな『新入生』がどんな印象をうけたか、容易に想像できよう。彼等は大挙襲撃（ストーム）して新入生を回心させようとした」[35]。この伝道は一期生からアメリカのクラークに報告され、彼は「アメリカン・ボード」の年次大会の講演でこれに触れ、一期生たちは「全新入生を入れようと努力し、キリスト教伝道者の仕事を行っている」（傍線筆者）と述べた[36]。

一期生の対二期生伝道は、内村や宮部ら札幌バンドの中核となる重要な人材を回心と「イエスを信ずる者の契約」への署名に導いた。こうして一・二期生によって形成されたキリスト者学生集団の生活ぶりは、内村の『余は如何にして基督信徒となりし乎』や一期生大島正健の『クラーク先生とその弟子たち』を通して知ることができる。しかし、一・二期生の熱意は三期生には伝わらなかった、前にも触れたように三期生は、東京出発の前からキリスト教排撃の姿勢をとっていた。キリスト教を巡っては一・二期生と三期生の間は険悪であった。一期生の大島は三期生に対して、「この手合は一致団結して異教排撃を企て、基督教の信仰に入ることを誰一人として肯じなかった。……それかあらぬか第三期生の中では、各県知事を歴任した高岡直吉が多少頭角を現はしたくらゐで、傑出した人物は殆ど全く現はれず、学生としての記録に於いても止むべき何物をも残さなかった」[37]と冷やかな評価を下している。三期生および志賀重昂らの四期生の時期、キリスト教活動は後退したが、札幌農学校のキリスト教色はここで切れてしまったわけではない。こ

の後も学生による学内での聖書研究活動は続けられていた。(38)

そして札幌農学校の全卒業生名簿を各キリスト教会の会員名簿と照合すると、五・六期生あたりからキリスト教活動が盛り返していることがうかがえる。ちなみに教会別に教会員卒業生の姓を卒業期順に示すと次のようになる。括弧内の数字は卒業期を表わす。(39)

札幌独立基督教会（「札幌教会」）――(1)大島、黒岩、渡瀬、内田、田内、伊藤、柳本、(2)内村、宮部、足立、広井、藤田、(4)渡瀬、(5)小寺、野沢、(6)伊達、和田、柳内、(7)藤村、寺尾、三輪（十時）、内村、岡、(8)瀬尾、目黒、(9)鐸木、池内、宮崎、(10)小田切、(11)大島、出田、鹿討、(13)松村、(14)清水、大脇、岡田、(15)小谷、(17)笠原、中尾、(18)伊藤、吉田、川上、草場、渡部、苅宿、(19)森、有島、森本、井街、嬬崎、(21)西川、(23)末光、橋本、(24)高松、山村

日本メソジスト札幌教会（現在の日本基督教団札幌教会）――(1)佐藤、(19)石沢

北辰教会（「一致教会」、「長老教会」、現在の北一条教会）――(11)小川、(13)萱場、(15)時任、(16)佐々、(20)芳賀、(22)小川

札幌組合基督教会（現在の北光教会）――(18)神田、長嶺

札幌聖公会――(11)須田

クエーカー派――(2)新渡戸

カナダ・メソジスト派――(3)佐久間

以上を集計すると、札幌農学校第一期から第二四期までの卒業生総数三八二人のうち、教会籍のあった者は六八人であり、約六人に一人の割合である。このうち五五人は、一・二期生らが中心となって作った札幌独立教会（この名になるまでは「札幌教会」あるいは「札幌基督教会」と称した）の会員であった。約六人に一人という割合は、恐らく当時のキリスト教主義学校にさえ比肩するものではないかと思われる。近年、一・二期生対三期生の反目や、四期生志賀重昂の国粋主義主張を根拠にして、札幌農学校のキリスト教色は一・二期生どまりだとする説があったが、右の統計的調査はその説が誤りであることを教えてくれる。

御雇教師の漸減とともに初期卒業生を中心に教師陣容が整えられていくが、彼らの多くがキリスト者かあるいはキリスト教に理解を示す者であったために、学内のキリスト教活動は他の官学には見られないある種の市民権を与えられた活動であった。第一期生大島正健は、級友や下級生の多くが離札・留学するなかで、札幌農学校にとどまり教鞭をとるが、そのかたわら誕生間もない札幌独立教会の牧師をつとめ、一八九三年（明治二六）の離札まで札幌農学校内外のキリスト者や求道者を牧し

た。官学の教員が牧師を兼ねるという異例なことがともかくも容認されていたのである。もう一例を挙げれば、一九〇四年（明治三七）に『札幌之栞』[40]という四〇頁ほどの小冊子が、札幌農学校の新入生に配られた。編者は札幌農学校基督教青年会と札幌基督教青年会であり、内容は学都としての札幌を事細かに述べた後、札幌農学校および札幌のキリスト教活動を紹介したものである。このような内容の、便覧に相当する冊子が作られ、入学時に学内で配布されたことは、キリスト者学生集団が一つの勢力であり、その活動がいわば公認のものであったことを物語るであろう。

5　教派協力的性格

最後に札幌農学校へ伝えられたキリスト教が教派協力的性格を持っていたことに触れよう。クラークは来日時、組合（会衆）派に属していたが、福音主義を宣明している限り、換言すれば大まかに言ってカトリック・ギリシャ正教・モルモン等を除き三位一体説に立つ限り、教派的なこだわりを持たなかった。彼はアメリカで三つの教会に関係したが、いずれも教派的には柔軟な姿勢を持つ教会であった。[41]フロンティアや海外での伝道に対応するために生じた教会の教派性に対する姿勢の変化が、クラークにも影響していたと考えてよいであろう。次の事例がこの姿勢を物語る。彼は札幌に着任早々、札幌で最初の洗礼式のために官邸を提供したが、それは英国監督教会（聖公会）の宣教師デニングによる第一期生伊藤一隆への洗礼式であった。またクラークが自分の弟子たちの洗礼を託したのは、メソジスト派の宣教師M・ハリスであった。またクラークの残した「イエスを信ずる者の契約」の中には前出のように「我らはしかるべき機いたれば、試験を受けて受洗し、福音主義の教会に加わることを約束する」という部分がある。つまり、彼は「福音主義の教会」とだけ述べて、特別の教派や教会を指定していないのである。それゆえに彼の弟子たちは、「一切の教派について格別可否も考えずに」[42]、ハリスのメソジスト教会に加わった。

しかし、クラークが去って数年を経ずして、宣教諸団体の教派性主張が顕然化するという事態が札幌にも生じた。内村によれば一八八〇年（明治一三）秋「この小さな町に二つの教会――聖公会とメソジスト――ができる様子がはっきりしてきた……我々は信仰生活に入ってから初めて教派主義の弊害を知った」[43]。「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ」[44]という教えは一体どうなるのか。そこで目指されたのが、在札のキリスト者の合同と独立であり、こうして札幌農学校一・二期生のキリスト者を中心に、自給で諸教派から独立した、札幌でただ一つのプロテスタント教会が一八八二年の暮に成立した。これが札幌

独立基督教会の前身「札幌教会」である。これをメソジスト派の宣教年次報告書は「サッポロ・ユニオン・チャーチ」と呼んでいるが[45]、まさしく教派合同(ユニオン)の教会なのであった。ちなみに札幌独立教会の教派協力的姿勢は、明治三十年代中央にあって内村が無教会主義を標傍し始めるのと歩調を合わせて、次のような主張をとり始めた。有島武郎は「札幌独立基督教会沿革」(一九〇八年)の中で、「当教会の願は諸宗派を合同して勢力の扶植を計ろうと言ふのではありません。却て反対に諸宗派を無くなして凡ての基督信徒が一体になる事に尽力しようと云ふのであります。札幌独立教会があるのは取りも直さず一つの新宗派を樹立する事で当教会其の者の主義天職と称するものと全然反対矛盾した現象だとの非難もある様でありますが夫れはそう非難する人の誤解で当教会は凡ての宗派が合同すると同時に消滅すべき運命にあるものなる事を御承知ないのに依る事と信じます[46]」と述べている。札幌農学校へ伝えられたキリスト教の特色が、札幌独立基督教会という別の歴史個性において示した一つの帰結であった。

おわりに

一九二〇年(大正九)農学科を卒業した桜井芳次郎は、翌年の『文武会々報』に通信を寄せ、学生時代を振り返って次のように述べている。「其頃の集会の席上では頻りに、此頃の学生の気風が一変したとて、二年、三年の連中は、議論や忠告をして呉れたが、それは今から想へば確に、其頃が札幌の学生思想界変遷の、最後の過渡期だったかも知れない。一口に言へば、古典的な昔の札幌農学校時代の宗教味を帯びた、神秘的な学生生活が消えてなくなり、内地の高等学校の衒気に充ちた、学生気分が漲って来たと云う事で、批難をする人も弁護する人もあった[47]。」

これより六年後の一九二六年(大正一五)五月に北海道帝国大学創基五十年記念式典が行われたが、内村鑑三は五月九日の日記に次のように記している。「札幌独立基督教会牧師金沢常雄君よりの書簡に曰く……札幌の俗化も最早救ひ難い程度であります。クラーク先生は泣き給うでせう。……クラーク先生の胸像の除幕式を行ふは恰かも預言者の碑を建るが如きであります。何となれば今や大学内に同先生の信仰も精神も忘れられ棄られて居るからであります。云々　自分も同感である。それが故に自分は今回の五十年記念祭に出席せざる事にした。たゞの『お祭り』である。学者や志士の出席すべき所でない。嗚呼堕落せる哉我が札幌よ[48]」。

金沢や内村の評言には、彼らの潔癖性ゆえの誇張があろう。しかし、桜井が観察したような変化は起こりつつあった。学内

はかつての「禁酒禁煙の誓約書」の精神が支配するキャンパスではなく、学生生活は他官学と似てきた。札幌農学校は一九〇七年（明治四〇）東北帝国大学農科大学となり、一九一八年には北海道帝国大学となった。さらに農学部の他に諸学部が増設され、規模が拡大すると教員構成にも変化を生じた。帝国大学としての教育プログラム充足のためには、必ずしも精神的伝統とはかかわりのない人事が進められた。農学校から帝国大学への拡大・充実期は、キリスト教色の減退期と重なり合ったといえる。もちろん佐藤昌介や宮部金吾らのようなキリスト者が長期にわたって学内有力者であり続けた間は、学生生活の変化や規模拡大・学部増による教員構成の変化にもかかわらず、外部にはなおキリスト教色のイメージを与えていた。しかし、それも内村のような目から見れば無きに等しく、やがて彼らの退官とともに次第に消えたとみるべきであろう。

〔注〕

（1）『北大百年史　札幌農学校史料(一)』一九八一年、三三一―三三二ページ

（2）前掲書、三四一ページ

（3）逢坂信忠『再版クラーク先生詳伝』クラーク記念会、一九六五年、三二四ページ

（4）矢内原忠雄「私の人生遍歴」（『矢内原忠雄全集』二六巻、岩波書店、一九六五年、所収）二三六ページ

（5）田中良一「熊本バンドと同志社」（住谷悦治編『日本におけるキリスト教と社会問題』、みすず書房、一九六三年、所収）八四ページ

（6）M・リボー「北海道の旅」（一八九七年）（H・チースリク編『宣教師の見た明治の頃』キリシタン文化研究会、一九六八年、所収）二五六ページ

（7）『札幌基督教信徒名簿』（一九一〇年）参照。北海道大学図書館佐藤昌介記念文庫所蔵（本書は北方資料室管理）。

（8）前掲書、巻末統計。札幌総人口は、札幌区役所編纂『札幌区全図　縮尺二万分之一』（一九一〇年、札幌市教育委員会『札幌歴史地図〈明治編〉』一九七八年に覆刻所収）による。

（9）各人の典拠については、大山綱夫「札幌バンドの性格を巡って――札幌におけるアメリカ・プロテスタンティズムの展開――」（北海道基督教学会編『基督教学』九号、一九七四年、所収）一七ページを参照。

（10）大島智夫「大島正健の東都遊学」（北海道大学創基百周年記念事業実行委員会出版専門委員会北海道大学百年史編集室編『北大百年史編集ニュース』五号、一九七八年、所収）八―一一ページ

（11）*The Congregationalist*, June 5, 1878.

（12）太田雄三『クラークの一年――札幌農学校初代教頭の日本体験――』昭和堂、一九七九年、一三六ページ、一五二ページ

（13）クラークから義弟キャプテン・ウィリアム・B・チャーチル宛書簡。一八七六年十一月十九日付。発信地、札幌。訳文は、太田、前掲書一四九―一五〇ページ

(14) A. Hanish Ion, Edward Warren Clark and Early Meiji Japan : A Case Study of Cultural Contact, *Modern Asian Studies*., 11, No. 4, p. 561, 569. 1977.

(15) クラークから妻宛書簡。一八七六年七月二十三日付。発信地、東京。太田雄三「前掲書六三ページ

(16) クラークの帰国後の講演、一八七七年十月十四日。*Amherst Record*, Oct. 17, 1877. 訳文は太田、前掲書一五四ページ

(17) 須々木邦造編『札幌基督教会歴史』（札幌、一八九五年）五—六ページ

(18) 注(16)同所。

(19) クラークから妻宛書簡。一八七六年十一月二十一日付。発信地、札幌。太田、前掲書一五九ページ

(20) 注(17)同所

(21) 注(13)同所。訳文は、太田、前掲書一五一ページ

(22) *Annual Report of the Sapporo Agricultural College*, 1877, pp. 57—76, 126—133.

(23) 大山綱夫「考証アマストの内村鑑三」（『内村鑑三研究』九号、一九七七年）九二ページ

(24) 内村鑑三「余はいかにしてキリスト信徒となりしか」（松沢弘陽編訳『日本の名著38　内村鑑三』（中央公論社、一九七一年、所収）九一—九二ページ。英文原本は札幌独立基督教会に保存されている。

(25) クラークから妻宛書簡。一八七七年三月五日付。発信地、札幌。訳文は、太田、前掲書一七六ページ。

(26) 井門富二夫「アメリカ宗教の体質——ピューリタニズムとの関連において」（講座アメリカの文化1　『ピューリタニズムとアメリカ』南雲堂、一九六九年、所収）参照。

(27) *Amherst Record*, Feb. 2, 1877.

(28) *The Independent*, Feb. 22, 1877.

(29) *Sixty-Seventh Annual Report of the American Board of Commissioners for Foreign Missions*, Boston, 1877. p. 63.

(30) 町村金彌「札幌農学校入学前後の思出」（『社団法人札幌同窓会第六十三回報告』一九四〇年十二月）三ページ

(31) 大島正健『クラーク先生とその弟子達』帝国教育会出版部、一九三七年、一五九ページ

(32) 山鹿旗之進「落葉のかきよせ（五）」『教学時報』一九二一年七月二九日号所収。ただし抄訳のみが紹介されている。

(33) 前掲『北大百年史　札幌農学校史料(一)』三四三ページ

(34) 太田、前掲書、一八七ページ

(35) 内村鑑三、前掲書、九〇ページ

(36) 注(11)同所

(37) 大島正健、前掲書、一七八ページ

(38) 一八八五年十二月九日付で学生藤邨信吉から校長森源三宛に聖書研究のための食堂拝借願が出された。これは許可されなかったが、学生の自主的バイブル・クラスが持たれていたことを物語る。前掲、『北大百年史　札幌農学校史料(一)』七七八ページ

一八八七年四月十四日学生高林甲子治郎らの連名で聖書研究のた

め復習講堂借用願が出され、許可された。『北大百年史　札幌農学校史料(一)』一九八一年、六八―六九ページ

(39) 大山綱夫「札幌バンドについて――成立とその性格」(北海道史編集所編『新しい道史』七六号、一九八〇年、所収)一〇ページ

(40) 札幌農学校基督教青年会・札幌基督教青年会編『札幌之栞』札幌、一九〇五年。北海道大学図書館北方資料室所蔵。

(41) 大山綱夫「クラークとキリスト教」(前掲『北大百年史編集ニュース』五号)三―四ページ

(42) 内村、前掲書、一〇一ページ

(43) 前掲書、一一一ページ

(45) 前掲書、同所

(45) *Sixty-Fifth Annual Report of the Missionary Society of the Methodist Episcopal Church for the Year* 1883, New York, 1884. p. 182.

(46) 『有島武郎全集』一巻、筑摩書房、一九八〇年、四二一ページ

(47) 『文武会々報』九一号、一九二一年、六四ページ

(48) 『内村鑑三全集』一八巻、岩波書店、一九三二年、三五七ページ

(恵泉女学園短期大学教授)